

山は多く莊園領地をうばわれ、延暦寺、金剛峯寺、熊野三山、九州地方では英彦山等に浪人僧を出すこととなった。

彼等は乞食坊主や虚無僧となって衣食を外に求めたが、その一部は自然の勢いとして伴天連に買収され、結果として彼等の宣教の手先となった事実が「南蛮伴天連いるまん同宿白状覚」等に伝えられている。

結論として云える一つのは、慶長八年、妙典寺において世に石城問答と呼ばれる宗論が行われ、問答の主であった京妙覚寺僧日忠が国主長政から寺地を賜わり、勝立寺開山となったことは疑いを容れない事実である。たゞ日忠の晩年については不明であり、本問答以後は筑前の切支丹が一掃されたと云うほどの事件ではなく、局部的の出来ごとであって、全体として家康の禁止令まで切支丹宗門の繁栄をみたわけである。更に問答記録「邪正問答抄」が最も史実に近いものとするなら、伊留満旧沢は仏教僧侶出身であった可能性が強いと云うことになる。昭四三、一、十四

○参考文献

博多妙典寺先住不勉院日中上人筆録
博多妙典寺三十世究竟院日等上人筆録

「日本宗教史の研究」長沼賢海著
日蓮宗年表 日蓮宗史料編纂会編
石城志 津田元願編纂

立正大学 文学修士
中村学園女子高校教諭
立正大学仏教学会々員
身延山短期大学々会員
博多妙典寺副住職

「マンドラゲについて」

岡 田 栄 照

法華経・序品に「曼陀羅 曼殊沙華を雨らし栴檀の香風は衆の心を悦可す」阿弥陀経に「かの仏国土は常に天衆をなし、黄金を地となす。昼夜六時に、曼陀羅華を雨らす」とあり、弘安四年十一月十五日附の上野殿御返事に「妙法蓮華経と申は蓮に譬^へられて候。天上には摩訶曼陀羅華、人間には桜の花、此等はめでたき花なれども、此等の花をば

法華經の譬には仏取給事なし」(定本一八九〇頁)とみえている。

周知の如くマンダラゲは仏典にしばしば、その名の見える聖なる花である。

広辞苑をはじめ多くの国語辞典のマンダラゲの説明に於けるその源流をたずねてみると、天華華は「天華のうち妙なるものを以てマンダラゲと名づく」という大智度論九九に由来し、吉蔵の法華義疏、二にみえる「マンダラゲとは、河西の道明の云わく、天華の名なり。中国にも亦之あり、其色赤に似て而も黄、青の如くにして而も紫、緑の如くにして而も紫、緑の如くにして而も紅なり」が想定せられ、適意華は「マンダラとは此に適意と云う。見る者心悦ぶが故なり」と説明せられる法華經玄贊第二に由来するものと考えられる。

「白い華」という訳語を与えているものは詠詠名義集によるものと思われる。

「白い蓮華」という説明もみられるが、「白い蓮華」と「マンダラゲ」とは直接的になんの関連もない。この点に

ついては大崎学報一二二号(昭和42年7月)「法華」五〇四・五〇九・五一〇等、参照いたゞければ幸甚。

望月・仏教大辞典によれば

「但し増広本草綱目第十七下に曼陀羅を山茄子となし、和漢三才図説第九十四本に、朝鮮朝顔となせるは共に誤りにして是れ恐らく曼陀那と混同せしものならん」

マダナの項を同辞典で精査すると

「蓋し摩陀那は学名 *Vanguiera Spinosa* 及び *Datura stramonium* (Thorn apple tree) 等の植物の通名にして、其の樹皮・種汁等には毒素を含み、薬用に供せられ、之を食すれば狂酔するを以て、情熱の義なる梵語摩陀那の名を附するに至りしものならん。……」

Datura stramonium は、植物学の事典では「トゲナシ ヨウシュ チョウセンアサガオ」に相当する。チョウセンアサガオ、キチガイナスビ、別名をマンダラゲといわれている。

これはアジア熱帯原産のナス科の一年生草本でわが国に渡来したこの属は数種あって各地に地方名が多く、ナンバ

ニアサガオ、イガナスビ（周防）、トウナスビ（伊予）、ナリナスビ、ヤマナスビ、テンジクナスビ、チャメラソウ（江戸）、キアサガオ（下総）、オニナス（上総）、キバソウ（豊前）、バラモンソウ、ゲカゴロシ（讃岐）、チョウセンタバコ（遠江）、アイス（備後）などがあり、夏から秋にかけて葉えきに短柄を出し、大形の白花を開く。

金草にトロピン系アルカロイドを含むが主として葉と種子を用いている。種子はスコボラミン・ヒヨセシアミン・アトロピン、その他、油酸・テリノール酸などの脂肪油を含み、臭化水素酸・スコボラミンの原料となる。

スコボラミンは非常に有毒で、瞳孔を拡大し、神経を麻ひさせる作用があり、中枢神経系に対する作用は鎮静である。

ヴィルシュテッターの研究によって構造の確立したトロパン系アルカロイド・アトロピンは、中枢神経を最初に興奮させ、ついで麻ひさせる。副交感神経末梢は麻ひ的のみ作用し、点眼すれば「ひとみ」が散大する。

硫酸アトロピンとして日本薬局方に記載され、百日咳・

胃病・アヘン・モルヒネなどの解毒、虹彩炎などに使用されている。

マダナが学名ダトウラ・ストラモニウム、即ちチョウセンアサガオであるとすれば、慧琳音義第十八にみえるマダナについての、「西国の果名なり、此の国に無し。其の果大さ檳榔の如し、之を食すれば人をして酔悶せしむ。亦酔人果と名づく、薬に入れて用うるに堪うるなり」という記述は全体的に首肯しがたい。

チョウセンアサガオには檳榔の果実の如き果実は生じない。

望月・仏教辞典によればマンガラゲは学名 *Erythrina indica* であるという。之は、「でいこ」「でいぐ」漢名「刺桐」のことをいうのであって、インド原産のまめ科の高木で、四・五月頃、枝先から長さ二五センチぐらいの総状花序を一乃至三個開出して生じ紫色をおびた朱赤色の長さ六乃至八センチの蝶形花を密集してつける。

英和辞典を開くと、*mandrake* の発音がマンガラゲと

類似していることに由るのであろうか「曼陀羅華」という訳語をあてているが、*mandrake* は、仏典に登場する *heavenly flowers* のイメージとはあまりにもかけはなれている。

例えば、ロメオとジュリエット（四幕三場）、アントニオとクレオパトラ（一幕五場）ヘンリー四世（第二部一幕二場）ヘンリー六世（第二部三幕二場）オセロー（三幕三場）で、シェイクスピアが「呻き、呪い、狂乱、煩悶等」の描写に使用している。

坪内逍遙博士は *mandrake* をマンダラゲと訳し、或は悪魔林檎と訳している。

Bible (Genesis 30: 14—16) に於ては、*mandrax* は関根正雄氏によって「恋なす」と訳されている。

mandrake に対してマンダラゲという訳語を配当するのはどうかと思われる。

mandrake は、*may apple*、ポドヒルム、ミヤオソウ属の植物として限定する時、マンダラゲとの混同が解消するのではなからうか。

Podophyllum emodi Wall は、インドに産する多年草で、根茎、樹脂は下剤として使用せられることがあり、ポドヒルム脂を含み、ポドヒルム脂に含まれるポドフィロトキシシン・アルファ・ペクター・ベルタテイン、の実験動物ガンに対する作用は注目された。ミヤオソウは中国では、その根茎を鬼臼と称して百毒、悪氣を治する薬とし、蛇の咬傷に解毒薬とされている。

mandrake については *cural tree* なる訳語があてられる。

これは学名 *Erythrina heriacea* に相当し南米に最も普通にみられ、そのうちインド種のものは *Erythrina indica* で、インドラ神の天界の五種の樹木の一つであることはいままでもない。